

第9回大会報告

◆総括 坊主とお姫様 - 大会の総括に代えて -

美濃導彦

大会長（京都大学）

吉川先生から突然電話を頂いたのがこの始まりである。VR学会は設立当初から会員であり、研究室で関連研究は行っていたが、実質的には幽霊会員であった。大会は核になる先生が京大におられないと実施できない。幸いにして、横小路先生、角所先生、小山田先生、黒田先生、牧先生にご協力をいただけるということであったので、大会長を引き受けることにした。第8回の岐阜大会に参加する計画を立てていたが、直前に海外出張が入り、結局、大会とはどんなものかを知らずに準備に入ってしまった。こんなことでどうなることかと内心は心配していたが、実行委員の先生方が前回の大会の情報、資料を収集してくださり、

大会の流れは引き継がれ、何とか準備が進んでいった。忙しい人ほど仕事がよく出来るのだということも再認識させられた。実行委員の皆様のご協力に深謝する次第である。

実行委員会で、大会長の準備期間中の仕事は理事会に出席することと招待講演の講師を選ぶことの二つであることを認識



懇親会での大会長



曼陀羅をモチーフとした看板

し、テーマを何にしようかといろいろと考えた。京都は歴史文化が豊富な環境である。京都ではこの前の戦というと応仁の乱をさすという話がまかり通る。平安時代の貴族文化がその原点であるが、政治はたびたび比叡山からやってくる僧兵に悩まされる。その後、鎌倉、室町時代、それから応仁の乱である。応仁の乱の後にポルトガルからカルタが伝わり、これが天正カルタからめくりカルタ、花札へと発展してゆく。鎌倉時代の初期に藤原定家が編纂した小倉百人一首はこの流れに乗って戦国時代にカルタの形となる。百人一首といえば坊主めくり、そうか、これが京都の原点だという発想で、坊主とお姫様を呼ぼうと決めた。実行委員会でこの話をすると「坊主はいいですね。VRと曼茶羅は関係が深いから」という発言があった。曼茶羅は弘法大使空海が中国から持ち帰ったのが最初である。曼茶羅なら東寺、子供の頃よく遊んだ場所である。幸いなことに、私の所属する学術情報メディアセンターに客員教授としてきていただいている京都造形大学の鈴鹿先生が来年の秋に東寺でデジタル

曼荼羅の展覧会を計画されており、その企画に関していろいろとお話を伺っていたので、話はとんとん拍子に進んでいった。お姫様の方は予算の問題があったが、その道の造詣が深い高橋先生のご助力により実現することが出来た。

曼荼羅という形での人のつながりが今大会の成功の秘訣であったかもしれない。こう考えると大会が終わった今、空海の偉大さ、その洞察力に再び感銘するのである。

◆幹事より - 大会幹事からの第9回大会裏話 -

横小路泰義

幹事（京都大学）

思い起こせば、2003年の6月頃、美濃大会長の指揮下で大会準備を開始した。京都で大会を引き受けるにあたっては、京都大学内部の先生方に加え、大阪大学や奈良先端大の先生方の応援も期待できるので、実行委員のメンバーの人材面では心配が無かった。しかし、大会の開催場所についてはなんとかかなと思いき、実は実際に決めなければならなくなる時期が来るまでまじめに考えていなかった。これが少々混乱を招いた。VR学会大会の特徴である技術展示と作品展示、また大会の重要な収入源の一つである企業展示が可能となる会場を探そうとすると、実は意外と候補が少ないことに気付かされた。岐阜での第9回大会の場では、とりあえず開催が可能な「ぼるる京都」を暫定的に会場にすることをアナウンスしたが、この時点で実際に会場とした京都大学の100周年時計台記念館は既に候補となっていた。ただその時点では竣工もされておらず、予約さえできない状態だったため、まだ決定できずにいたのである。結局、竣工して間もない時計台記念館を会場とすることができ、AV設備が備わった物理系校舎の講義室とともに、参加者の皆様からはご好評をいただいたようで、準備をした側からすれば嬉しい限りである。実は時計台記念館では、最後まで悩まされ通しだった。展示のための電源増強工事を臨時増設で行うか恒久的な電源増強の工事で行うかが大会開始直前まではっきりせず、実行委員の間でやきもきさせられたのも裏話の一つと言えよう。結局恒久的な電源増強が完了したのはなんと大会開始1週間前を切った後であった。

またこれも準備した側の予想を上回るご好評を戴いた

懇親会企画も、実は「京都らしい企画といえば舞妓さんと呼ぶくらいしかないのでは？」と岐阜大会の懇親会会場で実行委員のメンバー間でほとんど冗談で言っていたことが、高橋先生のおかげで現実のものとなった。でもどうか京都の大学の先生はみんな祇園の置屋に顔が利くとは思わないでいただきたい。

東寺の曼荼羅見学のカルチャツアーも京都らしい企画と思われたかもしれないが、実のところテクニカルツアーとしての適当な訪問先が決まらなかった末の苦肉の策であった。結果的に真鍋先生の招待講演とあわせて、VRと関連の深い「曼荼羅」を大会のテーマとすることができ、抄録集や会場内の看板の曼荼羅をモチーフとしたデザインと合わせて、大会に一種の統一感を持たせることができたことと実行委員会側では自負している。

会場や企画だけでなく、第9回大会では10年の節目となる来年を控えて大会に新たな流れを作り出そうと幾つかの努力をした。一つは技術展示・作品展示に対しての奨励賞の設置である。その甲斐あってか、今回は展示の件数が増加した。これには常日頃よりVR学会の大会運営に気を止めていただいている大阪大学の北村先生のご意見が発端となっている。この場を借りて感謝申し上げたい。次は、一部のセッションを3Dセッションとしたことである。今回は企画アナウンスがかなり遅かったためあまり周知されなかったようであるが、VR学会らしいセッションとして今後定着してゆくことを願っている。論文集をCD-ROMのみとするのも、いずれそうなるのであるなら今回思い切ってやろうと、すんなりと決まった。ただやはり初めてのことなので思い至らなかった点が幾つかあり、奨励賞審査などではご担当者にご迷惑をおかけしてしまった。また参加者の方々に事前に十分アナウンスしていなかった

ため、戸惑われた方も多かったようで、反省する次第である。

今回の大会の成功の秘訣は、一言で言えば実行委員会のすばらしいチームワーク（いや、むしろ分散自律？）であったと思う。小文で記したことも、それぞれを担当戴いた実行委員のメンバーの努力の賜物である。この場を借りて感謝申し上げる。



懇親会での幹事